

ふくふくしめじの新たな栽培方法と新品種発見の試み

○片野高志

【はじめに】

県オリジナル品種のホンシメジ「ふくふくしめじ」（福島 H106 号。以下、H106。）は県内の生産者によって簡易ハウス内での自然環境を活かした栽培が行われているが、菌床の価格が高いことが課題となっている。また、H106 と収穫期が重複せず、収量が優れた新品種の開発が求められている。

今回は、通常の培地で使用されている培地基材の広葉樹チップと栄養体の押麦を、安価に入手できる資材に代替した培地で菌床を製造し、空調下で栽培試験した結果（試験 1）と、ホンシメジ野生株 9 株を空調下で菌床栽培し、きのこの形成能力を試験した結果（試験 2）を報告する。

【調査方法】

試験 1 培地基材を広葉樹チップと籾殻の 2 種、栄養体を押麦、丸麦、飼料用押麦の 3 種で組み合わせ、計 6 通りの培地を 1400mlPP ビンに充填し、殺菌後に H106 を接種した。
調査項目は、発生率、収量とした。

試験 2 広葉樹チップ培地を 450ml ガラスビンに充填し、殺菌後に野生株 9 種と H106 を接種した。
調査項目は、発生率、収量とした。

両試験ともに培養は培養室で 22±2℃、湿度 60~70%、120 日間、発生操作及び管理は、事前給水した鹿沼土中粒で菌床上面から 1~2cm ほど覆土し、発生室で 15±2℃、湿度約 100%で行った。

【結果】

試験 1 収量は広葉樹チップー押麦、籾殻ー丸麦、広葉樹チップー丸麦の順で高かったが、3 つに有意差はなかった。飼料用押麦を使用した菌床は収量が少なかった（図-1）。

試験 2 きのこの形成能力のある野生株が新たに 6 つ発見され、H106 と比較して収量が優れている株が 3 株あった（図-2）。

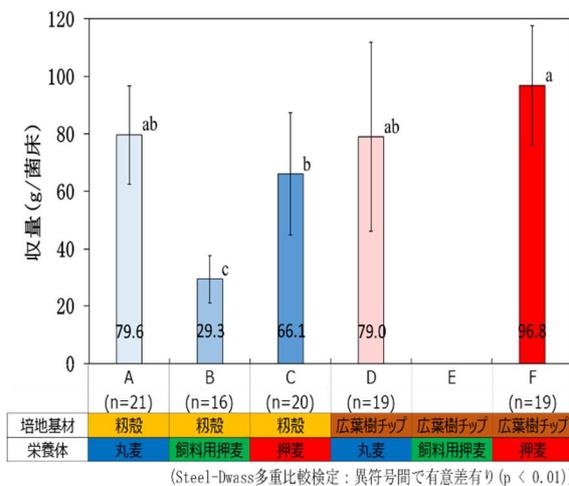


図-1 菌床ごとの収量(試験 1)

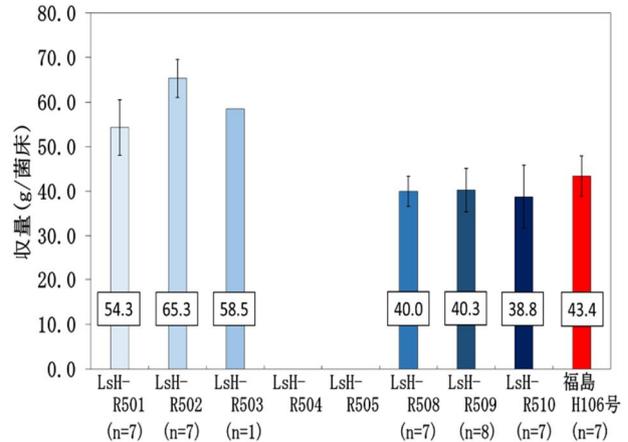


図-2 菌床ごとの収量(試験 2)

課題名：ふくしまほんしめじ栽培技術の開発と優良品種選抜